



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

第六十七回全国学生青年合宿教室開かる！

—真正なる「国家観」の再建を目指して—

内海勝彦

第六十七回全国学生青年合宿教室が九月三日から四日まで「大学セミナーハウス」(東京都八王子市)にて開催された。開催前に国内外で予期せぬ出来事が発生した。二月のロシアによるウクライナ侵略と七月の安倍晋三元首相銃撃事件とである。前者は戦後日本人が忌避してきた「自分の国は自分で守る」といふ国防意識の大切さを現実に見せつけた。後者は安倍元首相が唱へた現行憲法を頂点とした「戦後レジーム」からの脱却の継承が、日本にとっていかに重要な課題であるかを再認識させた。

この意味で、招聘講師の伊藤哲夫先生(日本政策研究センター代表)の「今、日本人に問はれるる歴史的課題—激動する国際情勢の中で」と題するご講義は時宜を得たものであった。先生はなぜ日本

人が「国家」を考へなくなつたかの背景について日本国憲法前文と米国憲法を比較して、日本国憲法には主権者の権利ばかりがあり義務が抜けてゐる。代償を払はずに福利を享受するといふ虚偽の内容となつてゐると喝破された。先生の「国民は責任を負はなくていいのか」との問ひかけが胸に重く響いた。また、安倍元首相が第二次政権で掲げた「日本を取り戻す」といふその「日本」は、日本の歴史や文化を愛する首相の無限の気持ちで籠つた言葉であり、さうした「日本」を再建したいとの思ひがこの言葉にあつたのご指摘は、元首相の心情を深く理解された先生ならではのお言葉と感じた。更に「日本を取り戻す」にはまづ「国家存立のために自衛隊を保持する」と憲法に明記することが重要と説かれ、それが「国家存

立」—則ち、国民が「国家」を考へる基盤をつくることに繋がるのご指摘は傾聴すべき卓見と思はれた。

また質疑応答での「追求すべきことが自分の幸せや快適さばかりだけぢやつまらないでしょ。日本のことを考へないでどうしますか。苦勞もあるがそれを乗り越えて、ああ俺は日本人なんだと、日本に生きてゐることを確認できることが生きがひであり一番の幸せ」とのお言葉に先生が普段抱かれてゐる御信念が伺へた気がした。

伊藤先生は「日本を取り戻す」ためには憲法改正とともに、歴史・伝統を取り戻すことが根幹であり、「歴史こそが国民を一つに結びつける紐帯である」と述べられてゐる。その意味で、次の小柳左門先生(学校法人原看護専門学校)のご講義「皇室に受け継がれる慈悲の御心」は、まさに日本の歴史の中核である皇室についての貴重なお話であつた。先生は「皇室が長く続いてきたのは慈悲の御心によるものである」と前置きして、多くの御歌や御文章を紹介された。例へば聖徳太子の御歌からは民やご家族への太子の深い愛情が感じられた。また近代においても、貞明皇后や香淳皇后の御

歌に、病や禍に苦しむ人々への深い慈悲の御心が伺へた。最後に、昭和天皇が、戦後、佐賀の戦災孤児施設(因通寺)に行幸された模様を記した「天皇さまが泣いてござつた」(調寛雅著)を紹介された。悲しみを乗り越えて健気なるまふ子供たちに馳せられる昭和天皇の御心がつぶさに拝察される内容であつた。

さて、ウクライナ戦争ではロシア軍の士気低下が目立つといふ。それは両国民の「国家観」の差とはいへまいか。「国を守る」との思ひは、自分達の家族や同胞、領土を守る気概と共に、自国の文化や伝統、国語への愛情の深さが基である。そこに軍事力を加へて総体として国の防衛力となる。それゆゑ、突然、大義なく攻め込まれたウクライナ国民は、男はもとより、女性や子供も後方支援で敢然と闘つてゐる。翻つて、中国・ロシア・北朝鮮といふ三つの核保有国に囲まれる日本はどうか。漸く軍事力強化に着手するとはいへ、国防意識の要となる自国の歴史や文化伝統への国民自身の理解、いはば文化力は十分と言へるだらうか。今合宿がそのことを考へる契機となれば幸ひである。

(元株) IHI